

将来を見据えた港湾整備 ～「マリンポートかごしま」のストック効果～

鹿児島県 土木部 港湾空港課

1. はじめに

鹿児島港は、錦江湾（鹿児島湾）のほぼ中央部の薩摩半島側に位置し、人口60万人を超える県都鹿児島市にある重要港湾です。

港湾区域は南北約20キロメートルに及び、北から本港区、新港区（写真-1）、鴨池港区、中央港区、谷山一区、谷山二区、浜平川港区の7つの港区に分かれており、それぞれの港区ごとに機能分担が図られています。

鹿児島港は県内物流の拠点として、また、桜島航路、垂水航路の湾内航路や種子島・屋久島航路、奄美・沖縄、三島、十島等の離島航路等の発

着場として、県内外の人流・物流の中心的役割を担っており、平成27年の実績で船舶乗降人員数は572万人（全国第2位）、入港船舶隻数は4.9万隻（全国第7位）、取扱貨物量はフェリー貨物を含め3,470万トン（全国第22位）、自動車航走車両台数は206万台（全国第1位）となっています。

さらに、広大な静穏水域や変化に富んだ海岸線など優れた自然資源を有する錦江湾に囲まれ、眼前には雄大な桜島がそびえ立ち、鹿児島市の市街地を含むその景観は「東洋のナポリ」とも称される自然景観、歴史、文化に恵まれた港湾であり、今から40年近く前の昭和54年に「クイーン・エリザベス2（7万トン）」が寄港するなど、多くのクルーズ船が寄港しています（写真-2、3）。

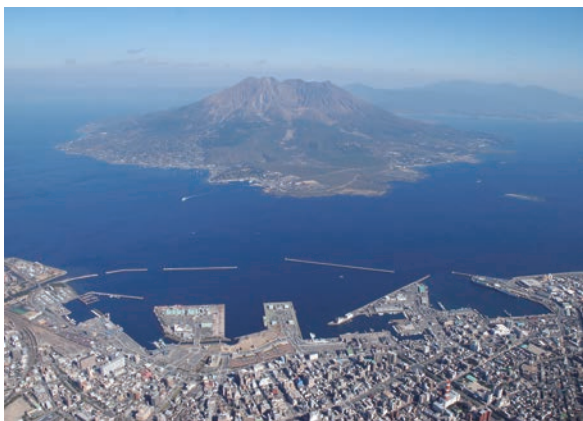


写真-1 桜島・錦江湾と本港区、新港区

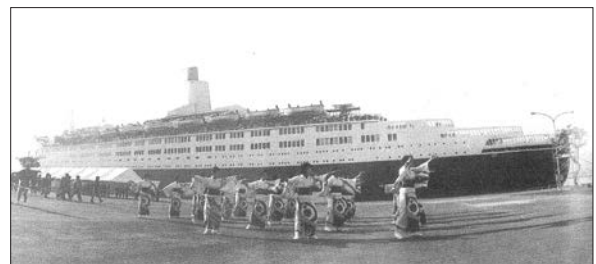


写真-2 クイーン・エリザベス2寄港（S54.3）



写真-3 マリンポートとクルーズ船 (H29.7)

2. マリンポートかごしまの整備概要

鹿児島港の中央港区に位置するマリンポートかごしまは、平成2年の県総合基本計画に「大型観光船ふ頭の整備等」として位置付けられ、21世紀の県政発展のために必要な施設として、国際交流拠点の形成や広域防災拠点の形成などを目的とし、平成5年の港湾計画の改訂を経て、平成11年に1期事業(24.0 ha)に着手しました。平成19年3月に1期1工区(10.3 ha)の埋立を完了、平成19年9月に大型観光船ふ頭(水深9.0 m、延長340 m)および背後の緑地などを供用開始し、供用開始日には「サファイア・プリンセス(11万6千トン)」が寄港しました(写真-4)。

1期1工区の供用後、引き続き、桜島の土石流



写真-4 1期1工区供用開始 (H19.9)

土砂などによる埋立を行い、平成24年3月に、1期2工区(13.7 ha)の埋立が完了しました。1期2工区には多目的な利用が可能な約4 haの芝生広場や子供達が水と触れあえる親水広場、緑地全体を見渡せる芝生観覧席、ジョギングなどを楽しめる園路、離島等の急患搬送用のヘリポートなどを整備し、平成28年7月に1期2工区の全面を供用開始しました。

1期2工区の供用開始日には、1期1工区の供用開始時と同じサファイア・プリンセスが寄港し、多くの県民が歓迎しました(写真-5)。



写真-5 1期2工区供用開始 (H28.7)

3. マリンポートかごしまのストック効果

鹿児島港へのクルーズ船の寄港については、平成29年は約110回となる見込みで、平成25年と比較し、寄港回数は約5倍に、旅客数は約11倍に増加しており(図-1)、マリンポートかごしまにおいても、供用開始以降、450回を超えるクルーズ船の寄港があります。

また、平成27年4月に供用を開始したヘリポートは、多くの離島を有する本県においては、ヘリによる離島からの急患搬送に必要不可欠なものであり、24時間利用できるヘリポートとして十分に活用されています(平成28年度利用実績115回)。

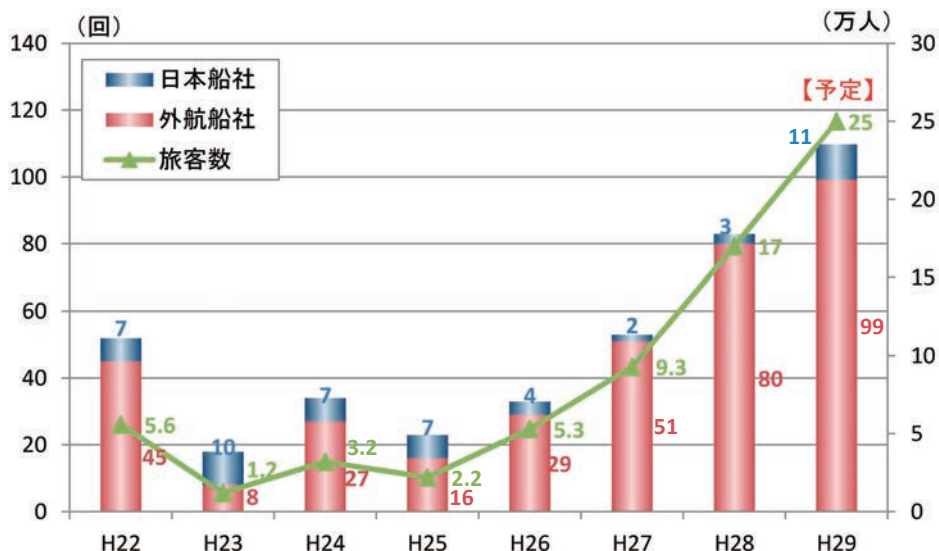


図-1 鹿児島港におけるクルーズ船の寄港回数

また、正面に桜島を望む親水広場は、年間1万5千人が訪れるなど、多くの親子連れで賑わう観光スポットとなっています(写真-6)。

このように、マリンポートかごしまは、クルーズ船の寄港のみならず、県民や観光客など錦江湾と桜島の景観を楽しむ多くの方に利用されています。



写真-6 親水広場の利用状況

4. マリンポートかごしまにおける取組み

現在、マリンポートかごしまにおいては、CIQ(税関、出入国管理、検疫)機能や物販・交流スペースを有する「かごしまクルーズターミナル」

の整備を、今年度末の完成を目指し進めているところです。

現在、入国等の手続きを船内で行っていますが、ターミナルの完成後は同施設内で行うこととなり、手続きの迅速化が図られ、観光地等に、より長く滞在してもらえることが期待されています(図-2)。

また、マリンポートかごしまの大型観光船ふ頭は、計画当時の寄港実績から水深を9.0mで整備しているため(図-3)、現在、寄港できる最大のクルーズ船は「マジェスティック・プリンセス(14万3千トン)」となっています。

一方、近年のクルーズ船の大型化に伴い、現在、日本には16万トン級のクルーズ船が寄港し



図-2 かごしまクルーズターミナル

ていることから、これらの大型クルーズ船に対応するため、既存岸壁において、構造の検討や安全対策の検討を行いました。

検討の結果、クルーズ船と岸壁の離隔を確保することにより水深が確保され、16万トン級のクルーズ船の寄港が可能との結論を得たことから、今年度、空気式防舷材（φ 2,500, 8基）と係船柱（150t型, 6基）の整備を行っているところです（図-4）。

マリポートかごしまにおいては、クルーズ船の大型化に対応した岸壁整備などにより、さらに多くのクルーズ船が寄港することが期待されています。

本港区北ふ頭における取組み

鹿児島港におけるクルーズ船の受入れについては、マリポートかごしまのほか、中心市街地の天文館地区に近い本港区北ふ頭における取組みがあります。

マリポートかごしまにおいては、寄港数の増加に伴い、予約が重複し寄港できないケースが発生していることから、本港区北ふ頭において、国際クルーズ船を受け入れる上で保安上必要となるソーラスフェンスの整備などを行いました。

さらに、これまで寄港実績のある3万トン級を超える5万トン級のクルーズ船を受け入れるために、既存航路との調整や安全対策の検討などを進めているところです。

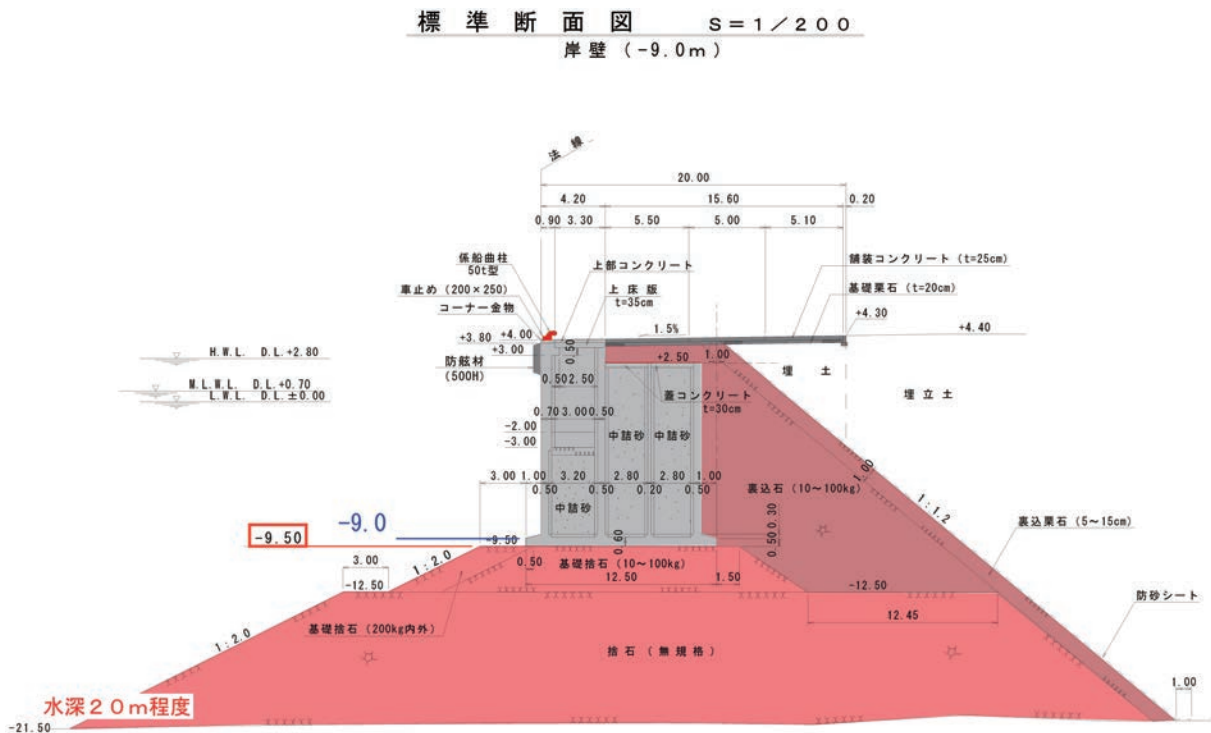


図-3 大型観光船ふ頭（水深 9.0 m）



図-4 16万トン級クルーズ船対応

5. おわりに

本県は、桜島や指宿温泉、世界文化遺産に指定された旧集成館、仙巖園（島津家別邸）などの豊富な観光資源を有しており、海外からの観光客にも大変喜ばれていることから、クルーズ船社の寄港意欲も高いものがあります（写真-7）。

本県の港湾整備においては、今後とも、「ストック効果」に着目するとともに、社会資本を「有効活用」することにより、効果的な港湾整備を着実に推進していきたいと考えています。



写真-7 仙巖園